

〈資料紹介〉

## 鳥居観音所蔵水野梅暁旧蔵写真史料目録 解題

広中一成・長谷川怜

埼玉県飯能市大字上名栗の白雲山鳥居観音には水野梅暁の旧蔵品が数多く保管されている。これら旧蔵品に含まれる約800点の写真史料については、劣化を防ぐため、2013年より約2年をかけて、愛知大学の研究グループの一員である筆者らによって、保存処理とデジタルデータ化が行われた。

写真史料の調査・整理の概要は、広中一成・長谷川怜(2015)「水野梅暁・藤井草宣関係史料の調査と保存」(『愛知大学国際問題研究所紀要』第146号、愛知大学国際問題研究所、131～146頁)で報告した。また、特に歴史的に貴重と思われる写真史料は、各種文献をもとに分析し、その成果の一部を、広中・長谷川・松下佐知子(2015)「鳥居観音所蔵 水野梅暁関係写真史料の紹介」(『同文書院記念報』Vol. 23、愛知大学東亜同文書院大学記念センター、209～220頁)で発表した。

そして、以上の成果をまとめて、広中・長谷川・松下編著(2016)『愛知大学東亜同文書院大学記念センターシリーズ 鳥居観音所蔵 水野梅暁写真集—仏教を通じた日中提携の模索』(社会評論社)を刊行した。

本稿は、鳥居観音所蔵の写真資料の全体像を明らかにする目的で作成した目録の解題である。なお、目録は本紀要に掲載予定であったが、紙幅の関係上、愛知大学国際問題研究所ホームページ (<http://www.aichi-u.ac.jp/aiaa/>) 上で2017年度より公開する。

以下、本解題と目録の利用に資するため、水野梅暁の経歴、史料整理とデジタルデータ化の状況、写真史料の歴史的価値、目録の概要をまとめる。

## 水野梅暁とは

水野梅暁<sup>(1)</sup>は1877年、広島県深安郡福山町（現福山市）で旧福山藩士の金谷俊三の四男として生まれた。13歳で出家し、広島県神石郡の曹洞宗法雲寺の住職水野桂巖の養子となり、水野に改姓した。

水野は、京都の臨済宗大徳寺高桐院で得度した後、1901年、生涯の師と仰いだ東亜同文書院初代院長の根津一に従って上海に渡り、中国での活動を開始した。

1905年、水野は湖南省長沙で中国人少年僧の教育に従事するかたわら、仏教を布教するために各地を巡った。その活動を通して水野は、仏教者だけにとどまらない幅広い人脈を築いた。そのなかでも、特に孫文や黄興といった中国革命家との繋がりは深かった。

水野は1910年代半ば頃から中国問題のジャーナリストとしての才能を開花させ、1924年には、外務省と日本実業界の支援を受けて、中国専門誌『支那時報』を発刊する支那時報社を創設した。

その一方で、水野は日中の仏教交流にも尽力し、1925年、太虚をはじめとする中国仏教界の代表者を日本に招いて東亜仏教大会を開催した。同大会は、長らく疎遠となっていた日中仏教界の交流を再開させたという点で、きわめて重要な意義を持った。また、翌年には日本仏教団を率いて中国各地の寺院や仏教関連施設等を巡遊した。

1932年、満洲国が成立すると、水野は東洋史学者として著名な内藤湖南らと日満文化協会を設立し、日満文化交流に力を注いだ。このとき、水野は日本の中国侵略を正当化する発言を繰り返したため、中国仏教界から激しい反発を受けた。

戦後、水野は中国から持ち帰った玄奘三蔵の遺骨を祀る舍利塔の建立に尽力し、1949年、病に倒れ亡くなった。

鳥居観音は、旧名栗村出身で埼玉銀行（現埼玉りそな銀行）初代頭取や参議院議員などを歴任した平沼彌太郎によって開かれた。

水野と平沼彌太郎との関係は、1935年、脳溢血の治療を受けた水野が、

---

(1) 水野梅暁の経歴の詳細については、『水野梅暁写真集』12～13ページを参照。

主治医柳川華吉の妻の実家であった名栗村平沼家で療養生活を過ごしたことに始まった。水野は、療養を終えた後も平沼家を自宅のように出入りし、平沼も東京の水野宅をたびたび訪れては親交を深めた。

太平洋戦争末期、東京が米軍機の空襲にさらされると、平沼は水野宅にあった家財道具一式と水野が中国での活動のなかで手に入れた品々を運び出して平沼家に疎開させた。これら水野の持ち物が、現在、水野梅暁旧蔵品として鳥居観音内の鳥居文庫に取められ一部公開されている。

## 史料整理とデジタルデータ化

鳥居観音に所蔵される水野梅暁が遺した一連の史料は、1984年10月に中国近代史研究者の中村義らを中心とした辛亥革命研究会のグループによって調査が行われた。その結果、鳥居文庫内に水野梅暁に関連する数多くの写真史料があること、またその写真に仏教関係者を中心に日中の様々な人物が写っていることが明らかとなった。その後、鳥居観音所蔵資料の調査・研究は同研究会によって継続され、近年では藤谷浩悦氏（東京女学館大学）が鳥居観音の川口泰斗氏を窓口として実施されていた。

しかし、写真史料に関しては学術的研究に向けた整理や調査がされないままであり、全体像や写真が持つ歴史的・資料的価値が十分に認識されてきたとは言い難かった。

近代中国と日本人仏教徒との関係について研究を進めていた三好章教授を中心とする愛知大学の研究グループは、2013年3月、川口氏の協力のもと、鳥居文庫に所蔵されている写真史料全点を対象とした初の本格的な学術調査を実施した。

この調査により、鳥居文庫の展示ケース下の戸棚や天井裏の書棚等からも新たに多くの写真史料が見つかった。それらの写真のなかには、鶏卵紙に焼き付けられた古いものも含まれ、一部はかなり劣化が進行していた。かつ湿度の高い状態に置かれていたことから、早急に保存処置を実施する必要があった。

現地における史料状態等の確認を踏まえ、愛知大学の研究グループは、写真史料全点の目録作成およびデジタル化、そして適切な保存処置を行う

ことを決定した。同年9月、同研究グループは、鳥居文庫で第2回目の調査を行った。そして、鳥居観音側との協議の結果、東京都内にある学習院大学の協力を得て、同大学の研究室に一旦全ての写真を運び出し、クリーニング、および電子化を実施することとなった。写真台紙からは紙魚やシバンムシといった文化財害虫が多く検出されたため、まずは脱酸素処理と害虫忌避剤の投与を行い、基本的な保存体制を整えた。害虫の駆除を行った後、全てを中性紙封筒に収納し、さらに中性紙箱に入れて空調が稼働する環境で保管した。

デジタル化は、ガラスが触れることによる損傷を防ぐため非接触型の大型スキャナを使用して行った。これらの作業は2014年7月までに終了し、中性紙封筒・中性紙箱に入れた状態で鳥居観音へ返却した。

史料の持ち出しに際しては、保管の現状を写真で記録したほか、保管されていた場所ごとに番号を振った。

## 水野梅暁関連写真の史的価値

水野の旧蔵品のなかには、水野が中国の要人から贈られた書画骨董をはじめ、仏具や写真など、歴史的貴重な品々が数多くある。特に800点にのぼる写真には、孫文や黄興といった中国近代史にその名を残す革命家から、太虚や王一亭といった中国側仏教者、犬養毅や頭山滿など、近代日中関係に深く関わった人物の姿が写されている。

遺された写真の年代は、明治30年代後半から昭和10年代後半まで長期間にわたっており、日中を股にかけた水野の活動時期に重なっている。水野に関するまとまった伝記と呼べるものはなく、唯一、その死後に関係者からの聞き取り等をまとめた松田江畔編(1974)『水野梅暁追懐録』(私家版)が存在するに過ぎない。学術的な分析も、その全生涯を網羅する段階には未だ至っておらず、今後の研究が待たれる。

鳥居観音が所蔵する写真史料の一部は、裏書や人名の記載が全くなく、いつどこで撮影されたのかわからないものがある。しかし、それらもこれまで十分に知られてこなかった水野の人脈や活動の詳細を伝える一級の資料であることには違いない。

調査の過程において、水野の旧蔵写真が『支那時報』をはじめとする水野の著作物に掲載されていたり、また水野とゆかりのあった人物の子孫宅に同じ写真が遺されていたりすることが判明し、撮影の歴史的背景や写された場所・人物などの特定が進んだ。その結果、いくつもの新事実を確認することができたのは大きな収穫であった。これらの情報は、前掲『水野梅暁写真集』の解説およびキャプションに反映したが、今後も継続して調査を続け、水野梅暁の生涯やその事績に関しさらなる解明を目指したいと考える。

## 目録の概要

目録は、左から親番号、枝番号、表題、年月日、備考の順になっている。親番号は、鳥居文庫内の写真保管場所ごとに振り分けた便宜上の番号である。

親番号は全部で1から24まであり、そのうち、親番号1から16までは、文庫1階の壁面に設置されたガラスケースに展示されていた写真である。それら写真の一部は写真立てに入れないうまま展示してあったため、経年により湾曲が生じたり、壁面に貼られたため画鋲の穴があいていたりするものもあった。さらに、文庫外部からの日光や文庫内天井に吊るされた蛍光灯の光に長くさらされていたため、それによる劣化も進んでいた。

親番号17から24のうち、17から20までが文庫1階の戸棚、21から24までが文庫2階の書棚に保管されていた写真である。それらの多くは、表向きに上から無造作に重ねられていて、保管状態があまりよくなかった。パノラマ写真も筒にしまわれていた一部を除き、丸く巻かれたままで棚のなかに放置されていた。これらの写真を適切に保存処理したことは、上記のとおりである。

枝番号は、親番号で示した文庫内各所に保管されていた写真、および書籍、絵はがき一点ごとに振った番号である。台紙に複数枚貼られている写真については、まとめて一点に数えた。保管されていた状態を後に復元できるように、ガラスケースに展示されている写真は上部から、棚のなかで重ねられている写真も上から順番に番号を振った。

表題は、写真内または台紙に記載がある場合は、原則的にそれに依った。その際、旧字体は新字体に直した。これに対し、記載がない場合、あるいは記載があったとしても表題として認められないと目録編集者が判断した場合は、〔 〕をつけて、写真の内容がわかる表題をつけた。また、史料の劣化等により判読できない文字は■で示した。

年月日は、原則的に写真または台紙に撮影日、または写真が贈られた日付が記載されている場合は、それに依った。また、それら年月日の記載がない場合も、後の調査でそれが判明した場合は、それを記した。備考は、写真や台紙の破損といった写真の現状や、同じ写真が文庫内の別の場所にもあった場合など、写真の保存に関する補足説明である。

写真や台紙の記述をもとにした表題、および年月日に明らかな誤植があった場合は、編集の際に適宜修正した。なお、表題の一部には、現在では適切でない表現、あるいは現在では使われていない地名なども含まれているが、歴史資料であるという点からそのまま使用した。目録データのチェックには松下佐知子氏（愛知大学東亜同文書院大学記念センター客員研究員）の協力を得た。